

◆ 公開講演会・研究会・ワークショップ報告 ◆

第1プロジェクト 第1回研究会

「イスラームにおける人権および言論の自由について」

日時 : 2009年5月23日 (土) 13:00~17:30
会場 : 新島会館 E会議室
発表 : 富田 健次 (同志社大学 神学部神学研究科 教授)
中田 考 (同志社大学 神学部神学研究科 教授)



「イスラームにおける人権および言論の自由」をテーマに二つの報告が行なわれた。富田氏報告は現代のイスラーム法学者による言説を事例として、イランのシーア派世界と近代西欧における人権、自由などの諸概念についての比較考察を行なうものであった。中田氏報告は政教分離や聖俗二分といった近代西欧から析出された概念の特殊性を補助線に、イスラームにおける宗教、信仰、言論の自由について説明を行なうものであった。



富田氏報告の内容は、現代イランを代表するアーヤトッラー・アーモリー師による言説の整理を中心とした。人権はその前提となる「人間（観）」が重要であるとアーモリー師は説くが、人間は物質と魂（精神）から構成されており、それらの内、人間の本質である精神が優先されるべきであるとする。また自由とは、「神以外のものに従属することからの解放」を意味すると説くが、そうした従属をも選択が可能とする近代西欧の「自由」を人間の道徳的基礎の危機と考える。これらに加えてイスラームと近代西欧との違いについて富田氏は、近代西欧では諸権利を政府や国家に委譲することなく、各人が保持し、政府や国家はそれらが侵犯されないよう保証に努めるのに対し（社会契約説）、イスラームでは諸権利が指導者の保護に委ねられることを指摘した。

中田氏報告の内容は、政治と宗教の分化が特に耳目を集めるシステム分化の観点に着目し、近代西欧から析出された聖俗二分や政教分離といった着想がきわめて特殊なものであると考え、それらをイスラームの世界観に移行して論じることの不可能性の説明を中心とした。具体的には、ローマ帝国とキリスト教会という二つの集権的官僚組織を受け継いだ西欧近代に対して、それを有さないイスラームにおいては、「俗」には概ね該当する概念「現世」があるが、その対義語「来世」は「聖」とは全く概念的に重ならないこと、また政治システムと宗教システムの分化に焦点を当てる「政教分離」が存在しない点を挙げ、「政治からの自由」を意味する西欧近代の宗教／信仰／言論の自由がイスラームでは問題としてそもそも取りあげられなかったことを指摘した。

二つの報告は、いずれも宗教的世界観に根付いた現世における人間の諸々の自由が、来世を他極とする線上でどのように規定されているかについて述べ進めるものであった。コメンテーターである濱氏と高木氏からは様々な点について意見が出たが、とくに人権や言論の自由に関する法規定についての問いは、その後のオープン・ディスカッションにも引き継がれる興味深いものとなった。

第1プロジェクト 第2回研究会

「ユダヤ教内におけるイエス派宗教運動—内在から分離へ」

日時 : 2009年6月13日 (土) 13:00~16:40
 会場 : 同志社大学 寧静館5階 会議室
 発表 : 石川 立 (同志社大学 神学部神学研究科 教授)

キリスト教はイエスが教えを広め、それを弟子達が継承した宗教と一般的に理解されているが、「キリスト教」に相当する言葉が歴史に初めて登場するのは、せいぜい紀元2世紀初めのことである。「キリスト教徒」に相当する語も、第一次ユダヤ戦争とエルサレム神殿崩壊が起こった紀元70年頃以降に初出が確認できるにすぎない。したがって、ユダヤ教とは異なるキリスト教という独立した宗教が徐々に形成されてきたのは、紀元70年以降と推定できる。

当時のガリラヤ地方は伝統的なユダヤ教文化から切り離された場所であり、「異邦人のガリラヤ」と揶揄されていた。またそこは肥沃な土地であったため、人々の流入と大土地所有者による土地の占有が生じ、その結果、貧富の格差が拡大した。宗教的、経済的に軽蔑と搾取の対象となっていた民衆を目の当たりにしたイエスは、その宗教運動において、父なる神との直接的な関係を説き、罪人として排除されていた病人や貧者に光を当てることで、ユダヤ教の儀式や律法を相対化し、その聖別システムを批判した。だが、イエスの宗教活動はユダヤ教そのものの相対化やそこからの離別を意味せず、ユダヤ教内部の宗教運動と看做すことができる。

イエスの死後、弟子達は一旦離散するが、イエス復活の証言の元に再び集結し、イエスをキリストと告白する新たな運動を展開する。それは主に、エルサレム教会に留まったヘブライオイと、アンティオキアを中心に活動したヘレニスタイという二派によって担われた。前者が律法や神殿を尊重するのに対し、後者はそれらには批判的に距離を取る。後者を代表するパウロは、復活のキリストに救いの道を求め、律法を相対化することで、異邦人伝道を展開した。しかし、パウロの意図はユダヤ教からの離脱ではなく、愛そのものであるキリストとの一致による、本来的なユダヤ教への帰還にあった。ヘブライオイは言うにおよばず、ヘレニスタイにしても自身をユダヤ教から独立した集団と看做すことはなく、ユダヤ教の一派という自己理解を持っていたのである。

第一次ユダヤ戦争の結果、神殿が崩壊すると、ユダヤ教はその中核部分を失い、壊滅的な打撃を受けることになる。それによりイエス派宗教運動の担い手も、アイデンティティ確立の問題に直面した。また、ユダヤ教徒に課せられた税である「ユダヤ金庫」の設立は、ユダヤ教とは異なる独自性の追及に拍車をかけた。そのために、イエス物語としての福音書が作成され、律法ではなくキリストを救いの道として明確に主張したパウロが再評価されることになる。これらの作業を通じて、ユダヤ教から独立したキリスト教と呼ぶべき集団が形成されていった。

その後、キリスト教が地中海世界に広がり、異邦人の信徒が増えると、キリスト教内部では、キリスト教がユダヤ教にその出自を持つという事実の忘却が始まる。またローマ帝国内の反ユダヤ主義も影響して、ユダヤ人に対する差別意識が芽生え始める。最終的にキリスト教教会がユダヤ教との血縁関係を切ることはなかったが、両者の間にはわだかまりが残り続けた。キリスト教は親近感を伴う愛憎の感情をもってユダヤ教と共存してゆくことになった。



第2プロジェクト 公開講演会

「フランスにおける“郊外の若者”の経験とイスラームについて」

日時：2009年6月27日（土） 13:30～15:00
 会場：同志社大学 神学館 礼拝堂
 講師：森 千香子（南山大学 外国語学部 准教授）



第二次世界大戦後、ヨーロッパには安価な労働力として多数の移民が入植することになった。その中には多くのムスリムが含まれており、その人口はEU全体で約1500万人と概算されている。フランスはEUの中で最大のムスリム人口を抱える国であるが、過去20年間にわたり、ことあるごとにムスリムの存在がフランス社会との摩擦を引き起こし、問題視されている。

その場合にイメージされているのは、社会的、経済的な意味で周辺化された貧困地域である（郊外）に居住し、主に北アフリカ出身の親を持つ若年層の男性ムスリムである。講演者は、そこに住む若者がどのようなムスリム意識を持っているのか、またその意識がどのような日常経験の中で形成されてきたのかという点を詳らかにした。

他の地域と同様に、郊外に住む若年層のムスリムにも就労状況や教育状況に関して多様性が見られ、それぞれの宗教実践にも幅がある。それにもかかわらず、彼らに共通しているのは自覚的なイスラームへの帰属意識と、アイデンティティとしてのムスリム意識である。こうしたムスリムとしての自己意識の形成においては、特に15歳から20歳までの期間、つまりおよそ中学校終了から高校生活の期間が決定的な役割を果たしている。講演者が実地調査を通して収集した事例が明らかにするのは、フランスの高校生活におけるネガティブな経験が彼らのムスリム意識の形成に及ぼす影響である。

ある男子学生の事例によれば、彼は自身の親のような肉体労働者とは違った、より良い労働環境を望んでいたが、低学力のために普通高校には進学できず、職業訓練高校に行かざるを得なくなった。しかし、職業訓練高校への進学は、将来の職業が肉体労働者に決定されてしまうことを意味している。制度的には普通高校と職業訓練高校の選択はもっぱら学術の成績によって決定されるが、実際には白人は普通高校に、移民の子供は職業訓練高校に進学することが圧倒的に多く、結果的に「学校内のアパルトヘイト」とも呼ばれるような状況が存在する。こうした学校間格差を是正するために、フランス政府は、普通コースと職業訓練コースを同じ構内に設置する複合的な高校を設立したが、かえって、白人の普通コースと移民の子供の職業訓練コースという民族的隔離状況を可視化する結果を招いた。この経験を通じて、移民の子供自身も、進学格差を民族のカテゴリーと同一視するロジックを次第に内面化して行き、やがて一般社会からドロップアウトする傾向がみられる。こうした事例とは異なり、郊外の若者の中にも、普通高校から高等教育機関へ進学する学生がいるが、人生の各段階で困難に遭遇した際に、過去に受けた民族的差別の経験が呼び起こされ、その状況を民族的出自に由来するものと理解する場合も多い。

民間団体のムスリム・アソシエーションは、こうした郊外の若者の経験の受け皿となっている。その中でイスラームは、北アフリカ出身移民の貧しい親の世代が実践する大衆的な宗教ではなく、ターリク・ラマダーンに代表されるような中近東の高学歴富裕層の実践する「かっこいい宗教」として紹介される。そこででの経験は、以前の教育状況では決して得ることのできなかつた知的欲求を満ち、西洋文明と比肩しうる、あるいはそれに優越する権威ある宗教としてのイスラームへと若者を誘う。このようにして、マグレブ移民という否定的自己イメージから、ムスリムとしての肯定的アイデンティティへの転換が生じるのである。

本来、公立学校は社会統合の役割を担わなければならない。しかし、実際には教育格差を生みだし、貧困層を排除することで、結果として、フランスの一般社会に対抗する価値観を醸成する場所となっている。ムスリムの存在によってフランスの価値観が脅かされているとしばしば語られることがあるが、実際には、郊外の若者をイスラームの価値観へと向かわせる状況が公立学校にあると言えるだろう。

第1プロジェクト 国際ワークショップ

「On Dialogue between Islam and Judaism:

“Others” and “Ours” in Re-thinking」

日時：2009年7月2日（木） 14:00～18:00

会場：新島会館 F会議室

Session 1 「From Religious Perspectives in Theories」

Guest Speakers: Yakov Rabkin (モントリオール大学 教授) “Non-Jews in Jewish Law”

Hashim Kamali (マレーシア国際イスラーム研究所 (IAIS) 所長/教授)

“Islam in Judaism: Juridical & Theological Perspectives”

Respondents: 三浦 伸夫 (神戸大学 教授)、市川 裕 (東京大学 教授)

仁子 寿晴 (京都大学 研究員)、中田 考 (同志社大学 教授)

ワークショップの初日はラプキン氏とカマリ氏による報告を中心として進められた。二つの報告はいずれも法規定を出発点とし、他者としてのユダヤ教徒とムスリムとの関係を取り扱うものであった。

まずラプキン氏の報告であるが、氏によればユダヤ教徒に関するこれまでの研究が、他者がユダヤ教徒をどう見てきたかという視点を中心とするのに対して、近年はユダヤ教徒が他者をどう見てきたかという視点を備えたものが増えてきているという。それになら

い、報告はユダヤ教徒にとっての他者視観がどのように形成され、変遷していったのかについて述べ進めるものとなった。従来、ユダヤ教徒のアイデンティティーはとくにユダヤ法ハラハーによって隔絶や差異化といった特徴を備えてきたが、後世にはレヴィナスのように、他者からの呼びかけに対してどう応答するかという点にアイデンティティーを確認するという主張も現れた。またイスラームとの関係については、多くのユダヤ教徒の学者がイスラームを厳格な一神教と見なしており、実質的に偶像崇拝者を指す他者概念「異邦人」とイスラームはやや異なる位置にあることなどを指摘した。



続いてカマリ氏の報告は、クルアーンにおける「啓典の民」としてのユダヤ教徒に関する言及から始まった。クルアーンにおいてユダヤ教徒は「ヤフード」、あるいは「バヌー/バニー・イスラエル」（イスラエルの子孫）と呼ばれ、他の宗教と比較した場合の優先的な扱いがとくに聖遷（ヒジュラ）後のマディーナ期の啓示の中で保証されている。氏はそれを示すものとして、ムスリム国家の下でのユダヤ教徒の信仰の自由、また様々な分野の社会生活を保証した、マディーナ憲章をとりあげた。その後も多くのユダヤ教がムスリムの生活世界に住んでいたことを考えると、ムスリムとユダヤ教徒との社会生活における関係を規定したマディーナ憲章の重要性はきわめて高い。以上のように、報告はクルアーンにおけるユダヤ教徒とトーラー、聖書への言及、およびマディーナ憲章に代表される預言者ムハンマドの時代に見られたムスリムとユダヤ教徒との関係について、広範にわたって整理するものであった。

以上の二つの報告に対してコメンテーターの三浦氏と仁子氏からは、近世イランの翻訳における他宗教の宗教用語の翻訳の問題や中世の哲学者ファーラービーのヨーロッパにおける影響といった、史実に基づいた比較材料が提示された。また中田氏と市川氏からは、マディーナ憲章は預言者ムハンマドによってあくまでも特例だと述べられていたことを考慮する必要があることや、報告にあった教義内容と現代ムスリムの一部に見られるラディカルな思想との根本的な関係、また現実的には世俗主義政党が主導するイスラエル国家とユダヤ教徒との関係をどう考えるかについて意見が述べられた。



日時：2009年7月3日（金） 9:30～16:00
 会場：新島会館 F会議室

Session 2 「From Historical Perspectives at Issues」

Guest Speakers: Esther Benbassa (ソルボンヌ大学高等研究実習院(EPHE) 教授)
 “Otherness, Openness and Rejection in Jewish Context”
 Osman Bakar (マレーシア国際イスラーム研究所(IAIS) 副所長/教授)
 “Inclusive Islam and Exclusive Islam in the Quran”

Respondents: 白杵 陽 (日本女子大学 教授)、Samir Nouh (同志社大学 教授)

Session 3 「From Reflections and Visions in Dialogue」

Initiators: 板垣 雄三 (東京大学 名誉教授)、岡 真理 (京都大学 教授)
 池田 明史 (東洋英和女学院大学 教授)



ワークショップの二日目は、前半はベンバッサ氏とバカル氏の報告を中心として、後半は板垣氏、岡氏、そして池田氏による問題提起を中心として進められた。

まずベンバッサ氏の報告であるが、氏は聖書に見られるユダヤ教徒（イスラエルの民）とそれに敵対する民族と見なされていたアマレク人（出エジプト記17章参照）との関係や、聖書ヘブライ語とイディッシュ語に見られる非ユダヤ教徒を示す用語（goy/goya, shekets, shikse）を取り上げ、ユダヤ教徒にとっての他者について史的、言語的側面から説明した。また氏は自身の活動拠点でもあるヨーロッパのユダヤ教徒あるいはユダヤ教観についてサルトルの著作に見られる反ユダヤ主義の歴史を中心とくにフランスの事例から説明した。

続いてバカル氏の報告であるが、氏は宗教における根本問題としての排他性と包括性を、イスラームにおける集合的な救済可能性の視点から論じた。氏はここでの救済を、来世ではなく現世の生活世界におけるもの（societal salvation）として規定し、そしてその現世での救済が来世での救済の決定要因となることを述べた。氏はイスラームの立場から、現世においてなされるイスラーム法の統治による共同体（ウンマ）が、その体内の他者をどのように包括すべきであるか、現状と可能性の双方を論じた。

以上の二つの報告に対するコメントとしてまず白杵氏からは、モロッコのユダヤ教徒と彼らのイスラエルへの移住についての事例が説明され、とくにベンバッサ氏によるヨーロッパのユダヤ教徒の報告を、より地域的な視点から眺めることができるのではないかという提言がなされた。またヌーフ氏からは、前日の三浦氏のコメントで触れられたイスラーム世界の拡大に伴う翻訳の問題についてアラビア語とヘブライ語の文学に焦点を絞った説明がなされ、また現代ヘブライ語（日常用語としてのヘブライ語）の父と呼ばれるエリエゼル・ベン・イエフダーへの言及もなされた。板垣氏、岡氏、そして池田氏による問題提起では、現代の中東を専門とする立場から一神教と多神教における宗教観構造の差異やパレスチナ難民についての問題に関する意見が多く出された。岡氏、また中田氏とヌーフ氏からは、パレスチナ難民の帰還権の問題や、これまで周辺国が難民の受け入れに対してどのように対応してきたかについて詳細な事実が提示され、議論は今日の問題を含む実りあるものとなった。



二日に及んだワークショップでは、各報告がイスラームとユダヤ教、それぞれの聖典についての解釈を含みつつ、報告者の出身国や活動拠点となる地域で見られるムスリムとユダヤ教徒の関係史について詳細な説明がなされた。また各コメントーターが現代の問題に言及することでその関係史の考察によりグローバルな視点が加わり、議論は活発なものとなった。

CISMORリサーチアシスタント 高尾賢一郎

第1プロジェクト 第3回研究会

「I・バーリンとL・シュトラウス：

政治マイノリティとユダヤ世俗主義」

日時：2009年7月11日（土） 14:00～18:00
 会場：同志社大学 寒梅館6階 大会議室
 発表：濱 真一郎（同志社大学 法学部法学研究科 教授）
 高木 久夫（明治学院大学 教養教育センター 准教授）

「I・バーリンのリベラリズムにおけるユダヤ的なもの」

濱 真一郎（同志社大学 法学部法学研究科 教授）

アイザイア・バーリンは、ロシア生まれのユダヤ人であり、のちにオックスフォード大学の教授となった政治思想史家である。かれが1958年に提示した「二つの自由概念」すなわち自由を「積極的自由」と「消極的自由」に分ける議論は、それ以後、自由について考察する場合に不可欠な前提となっている。

濱氏はまず、バーリンの自由論の中心には、価値多元論があることを説明した。価値多元論とは、諸価値は通約不可能で、両立不可能であり、衝突は避けられない、という認識のことである。そのことを確認したうえで氏は、バーリンについての最新の研究に依拠しながら「バーリンのリベラリズムにおけるユダヤ的なもの」を明らかにしていった。

バーリンは「ユダヤ・アイデンティティ」についてどのように考え、それはかれの「シオニズム支持」とどう関係していたのであろうか。それらを理解しようとするならば、かれの「ナショナリズム」についての考え方に注目するのがよい。

マルクス主義者であれリベラリストであれ、19世紀から20世紀の政治思想家は「ナショナルな思想の力」を過小評価する。対してバーリンは、それを重視する。「ナショナルな思想の力」といっても、価値多元論を基礎とするからには、それは排他的なものでも攻撃的なものでもない。バーリンは、「政治的ナショナリスト」と「文化的ナショナリスト」を区別し、後者のもつ「ナショナルな意識」を擁護したのであった。

一般的なリベラリストは次のことを見落としている。近代化によって孤立状態が生じている今日では、新しいアイデンティティの探求が必要になっている。アイデンティティの探求のためには共同体が必要であり、そうした「帰属へのニーズ」をふまえるならば、「ナショナルな意識」の意義が理解されるだろう。同様に「ユダヤ・アイデンティティ」や「シオニズム」も、この「帰属へのニーズ」にかかわるものにほかならない。

さらにバーリンがシオニズムを支持する背景には、ユダヤ人のおこなった同化の試みは失敗であった、という認識がある。同化は、安定したアイデンティティをもたらさなかったし、そもそも「真正性」を持ちえない。真正性や自己決定、自律のためにはシオニズムが必要なのである。とはいえ、すべてのユダヤ人はイスラエルに移住しなければならず、さもなくばユダヤ人としての独自性とアイデンティティを放棄するしかない、といったような二者択一的な不寛容は拒絶する。シオニズムはユダヤ人に「ユダヤ的環境と非ユダヤ的環境のどちらで生きるか」という選択の自由を与えた、というのがバーリンの考えである。かくしてバーリンは、リベラリズムとシオニズムを統合したのであった。



かれは生涯を通してイスラエルの熱烈な支持者であったが、その著作にはユダヤ思想についての言及はなく、イスラエルの侵略行為についても言及がない。そうした問題や批判を紹介したうえで濱氏は、バーリンが「絶望的な状況よりも少しマシな社会」という意味での「品位ある社会 (decent society)」を目指していたところに、その思想の意義と可能性があることを示して発表を終えた。

「二重のマイノリティ：ユダヤ人レオ・シュトラウスの哲学的近代批判」

高木 久夫 (明治学院大学 教養教育センター 准教授)

レオ・シュトラウスは、ドイツ生まれのユダヤ人で、ナチスの迫害をのがれて1938年にアメリカへ移住、のちにシカゴ大学の教授となった政治哲学者である。近年では、ネオコンの思想的始祖として俄かに衆目をあつめたが、研究のうえでは、そうした情勢論には到底おさまらない、多様なシュトラウス像が明らかにされつつある。

高木氏によれば当初、シュトラウスの哲学におけるユダヤ性は、ほとんど重要な要素とみなされていなかった。しかし、1990年前後を境に「ユダヤ思想家としてのシュトラウス」が再発見されることになる。この再評価の重要な証拠として繰り返し挙げられるのは、かれが『スピノザの宗教批判』（英訳版）に付した序文である。そこには、スピノザを経て中世最大のユダヤ哲学者マイモニデスに向かう、かれの生涯にわたる中心的な関心が伺える。青年期にはシオニズムにかかわったものの、かれは現実政治よりも、近代のユダヤ知識人を捕らえた「〈神学-政治〉問題」を正面に据え、「ユダヤ人問題」に取り組んだのであった。

そこでとくに問われたのは、表現の自由と価値相対主義に立つ近代のリベラル・デモクラシーが、「悪意をもつ自由」や「攻撃的な言説」までも認めることになり、果てはナチズムを容認した、ということである。シュトラウスの課題は、この種のリベラリズムや合理主義を批判的に吟味することであり、さらには「理性と啓示の相克」という古典的な「信知問題」を再検討することにあつた、といえよう。高木氏は、その一端をH・コーヘンやF・ローゼンツヴァイクへのシュトラウスの批判によって例示した。

では、何を手がかりに、そうした課題を検討すればよいのか。シュトラウスは、それを中世や古代に、具体的には「秘教的著述家としてのマイモニデス」に求める。マイモニデスの課題は、中世のユダヤ人の敬虔な信仰とアリストテレスの哲学に、いかに折り合いをつけるか、ということであった。シュトラウスによれば、マイモニデスは「二重の言葉」を使う。すなわち、ひとつの言葉によって、表面的には聖書の権威に依った道徳をわかりやすく説き、裏面では韜晦をまじえて哲学の真理を語る。近代のリベラリズムを批判的に検討するには、哲学的真理を内包した「秘教的著述」の注意深い読解が欠かせない。ゆえにシュトラウスは晩年、その技術を若者が身につけるための「教養教育 Liberal Education」をとりわけ重視したのであった。

近代の世俗的リベラリズムにたいする以上のような処方には、素直に受け容れがたいものがある。なぜならかれは、正統的なユダヤ人からすれば、律法学者マイモニデスを一面的にアテネの側に立たせたと見做されるし、哲学の伝統や「教養教育 Liberal Education」に期待をかけるといっても、現代の大衆的なリベラリズムからすればエリート主義と見做されるからである。ユダヤ人であり哲学者であるという二重の少数者性を生き、そのいずれにおいても多数者の基本的了解を逆撫でした、というシュトラウス像を、高木氏は示したのである。



第2プロジェクト 公開講演会

「オバマ政権の新中東政策を考える」

日時：2009年7月25日（土） 13:00～15:00
 会場：同志社大学 クラーク記念館 礼拝堂
 講師：山口 昇（防衛大学校 防衛学教育学群 教授）
 宮家 邦彦（AOI 外交政策研究所 代表）

「オバマ政権の軍事戦略：中東を中心に」

山口 昇（防衛大学校 防衛学教育学群 教授）

オバマ政権の軍事戦略について山口氏は、ブッシュ政権の後半、そして最近になって出された公式文書を手がかりにしながら説明していった。

アメリカの安全保障戦略の骨格は、①基本的な考え方が記されている「国家安全保障戦略」②それを国防省が実施するための「国家防衛戦略」③それらの戦略を各軍や統合司令官が実施するための「国家軍事戦略」、という三つによって形成される。そのうち②と③は、兵力構成を焦点にして4年毎に見直しがおこなわれるが、これをQDRという。これらが基本となつて、それにたとえば、今年3月に発表された「アフガン・パキスタン新戦略」といったような個別案件の戦略が加えられるのである。

2006年に出されたQDRでは、これまでと違ってアメリカのみ、軍事力のみでは何もできず、いろいろな方面とのパートナーシップを構築していかなければならない、という謙虚な判断が示された。そして、冷戦時代のような、通常戦力による紛争を想定した兵力整備（伝統型）から、テロなどの手段による脅威（非正規型）、大量破壊兵器などを用いたテロや「ならず者国家」による脅威（破滅型）、イランやロシア、中国など、アメリカの優位性を凌駕する技術や手段を用いた競争相手による脅威（混乱型）に対応するものへ、重点をシフトしていかなければならない、という問題意識が示された。

「国家安全保障戦略」とQRM（4年毎の役割と任務に関する報告）の要点としては、次のことが挙げられよう。戦略目標としては「本土防衛」が第一になった。これまでアメリカは、直接本土が攻撃されるということを考えてこなかった。ところが90年代に入り、北朝鮮のノドンやテポドンが増加し、オウムがサリン事件を起こすと、それに衝撃を受けてやっと「本土防衛」ということを意識するようになったのである。軍の主要任務としては、本土防衛と「民政支援」が第一とされた。従来においては、軍事力による抑止作戦が最優先されたので、これは画期的なことである。

ブッシュ政権との違いは、「アフガン・パキスタン新戦略」に表れている。オバマ政権はイラクではなくアフガニスタンとパキスタンを重視し、しかもアフガニスタンとパキスタンの関係が不可分なものであるという認識を示した。テロ対策は、テロリストをたたくだけでは駄目で、かれらを育ててしまう環境をつくらないようにしなければならない。軍事的な側面よりもむしろ、治安回復や社会復興、産業育成、統治機構の整備などに力をいれ、しかも、それらをアメリカではなく現地の人々に担ってもらうことが肝要である。

以上のような軍事戦略の転換は、具体的なレベルにも反映するようになっている。例えば、「安全確保（Hold）ができない所を掃討（Clear）しても意味がない」という「Clear - Hold - Build」という作戦戦略や、「ホスト国が行う最低限の



行為は、米軍の最良の行為よりまし」という叛乱対処マニュアルなどに、その影響が見られる。テロ対策は、軍事だけでなく、さまざまな側面での広範な協力が必要であり、何世代もかかるものであるということ弁えなければならない。それを強調して山口氏は、講演を終えた。

「オバマ政権の新中東政策？」

宮家 邦彦（AOI 外交政策研究所 代表）

宮家氏は、中東問題にかんする俗説を一つひとつ検証しながら、アメリカの中東政策について説明していった。

第一に、中東問題はすべてパレスチナ問題に根源がある、という説がある。確かにイスラエルの占領は正当なものではない。しかし、第三次中東戦争（1967）以前に戻るとするのは、もはや非現実的である。そもそも中東で、パレスチナのために本気で戦ったのはエジプトだけで、ヨルダン、レバノン、シリアといった他のアラブの国々はまともな支援をしなかった。むしろアラブ諸国は、自分たちの政権の正統性を維持するためにパレスチナ問題を利用した、といえる。したがって、中東が安定しない原因は、アラブ諸国の政権に、正統性や統治能力が欠如している、という点にもあると考えなければならない。



第二に、テロとの戦いは続く、という説がある。確かにそれは続くが、そこにアメリカの「自分との戦い」という側面があることに注意しなければならない。中東地域、とくに湾岸地域の安定には、イラン、イラク、サウジという三国のバランスが重要になる。1979年は、イランでイスラーム革命が起こり、この三国のバランスが崩れたという意味で画期的な年だった。力の空白を埋めるべく、イラクはイランに侵攻し、ソ連はアフガニスタンに侵攻した。アフガン紛争には、ソ連に対抗するためにイスラーム諸国から多くの義勇兵が参加し、アメリカはかれらを支援した。

1989年にソ連軍が撤退すると、サウジにも義勇兵たちが帰国する。その頃サウジには、湾岸戦争のために米軍が駐留することになったが、かれらは、これに反対して急速に反米意識を高めていく。かくして、アル・カーイダが組織されることになった。かれらに戦闘の方法を教えたのはアメリカであって、アル・カーイダとの戦いは「自分との戦い」という側面をも持つのである。

第三に、中東政策はユダヤ・ロビーが仕切っている、という説がある。車の両輪からなる米国の中東政策は「イスラエル」と「原油（対アラブ）」という両輪の大きさがある程度揃わなければ前に進まない。特にブッシュJr.政権になると、そこに中東を民主化しようとする理想主義の軸が加えられたので、両輪はさらに回りにくくなった。確かに「中東の民主化」は、ユダヤ系が多いとされるネオコンが提唱したものであり、オバマ政権の大統領首席補佐官（R・エマニュエル）もユダヤ系米国人である。しかし、オバマ政権は「中東の民主化」という理念を採っていないし、エマニュエルはネオコンではなく民主党の主流派である。米国はイスラエルと特別の関係を持つといわれるが、アラブ・アメリカ人が米国内で政治的影響力をもてないことも問題だと思う。

最後に、オバマの中東政策は新しい、という説がある。例えば、今年6月にカイロ大学でおこなわれたスピーチは、イスラーム世界との関係を改善するものだとして評価を受けている。しかし、それはレトリックが素晴らしいだけで、政策面で新しいものはない。また、イランとの対話は目新しいが、実現は困難であると言わねばならない。「アフガン・パキスタン新戦略」も、新しいヴィジョンというより、新しい火種というほうが適当である。宮家氏はこのように分析し、オバマ政権の一期目は、ブッシュ政権が過去8年間におこなった政策の負債返還に集中するのではないか、という展望を示して講演を終えた。

CISMOR特別研究員 藤本龍児

◆ 2009年度CISMORメンバー ◆

第1プロジェクト「グローバル化する一神教の思想的研究」

◎参加研究者

研究代表者 富田 健次	同志社大学 神学部神学研究科 教授
小原 克博	同志社大学 神学部神学研究科 教授
関谷 直人	同志社大学 神学部神学研究科 教授
原 誠	同志社大学 神学部神学研究科 教授
三宅 威仁	同志社大学 神学部神学研究科 教授
水谷 誠	同志社大学 神学部神学研究科 教授
村山 盛葦	同志社大学 神学部 助教
本井 康博	同志社大学 神学部神学研究科 教授
四戸 潤弥	同志社大学 神学部神学研究科 教授
中田 考	同志社大学 神学部神学研究科 教授
Samir Nouh	同志社大学 高等研究教育機構 教授
石川 立	同志社大学 神学部神学研究科 教授
越後屋 朗	同志社大学 神学部神学研究科 教授
Ada Taggar-Cohen	同志社大学 神学部神学研究科 教授
手島 勲矢	同志社大学 神学部神学研究科 教授
伊藤 玄吾	同志社大学 言語文化教育研究センター 助教
戒能 通弘	同志社大学 法学部法学研究科 准教授
濱 真一郎	同志社大学 法学部法学研究科 教授
鎌田 繁	東京大学 東洋文化研究所 教授
小林 春夫	東京学芸大学 教育学部 教授
塩尻 和子	筑波大学 国際担当副学長
市川 裕	東京大学 大学院人文社会系研究科 教授

◎共同研究員

磯前 順一	国際日本文化研究センター 准教授
今松 泰	同志社大学 神学部 嘱託講師
岩本 明美	関西大学 非常勤講師
John L. Esposito	ジョージタウン大学 教授
加賀谷 寛	大阪外国語大学 名誉教授
嶋本 隆光	大阪大学 日本語日本文化研究センター 教授
末木 文美士	国際日本文化研究センター 教授
高木 久夫	明治学院大学 教養教育センター 准教授
Osman Bakar	マレーシア国際イスラーム研究所 (IAIS) 副所長/教授
Michel Mohr	ハワイ大学マノア校 宗教学科 准教授
山岸 智子	明治大学 政治経済学部 准教授
矢野 裕巳	NPO法人 大本イスラエル パレスチナ平和研究所 常務理事/主任研究員

第2プロジェクト「多様なものの共存と社会統合」

◎参加研究者

センター長/研究代表者 森 孝一	同志社大学 神学部神学研究科 教授
村田 晃嗣	同志社大学 法学部法学研究科 教授
内藤 正典	一橋大学 大学院社会学研究科 教授
細谷 正宏	同志社大学 アメリカ研究科 教授
山田 史郎	同志社大学 文学部文学研究科 教授
浅野 亮	同志社大学 法学部法学研究科 教授
月村 太郎	同志社大学 政策学部 教授
水谷 智	同志社大学 言語文化教育研究センター 専任講師
藤本 龍児	同志社大学 一神教学際研究センター 特別研究員 (PD)
中山 俊宏	津田塾大学 学芸学部 准教授
松永 泰行	東京外国語大学 世界言語社会教育センター 准教授
河野 毅	在東ティモール日本国大使館
山本 貴裕	広島経済大学 教養教育部 教授
阿部 るり	上智大学 文学部 専任講師
森 千香子	南山大学 外国語学部 准教授
Peter Hervik	一橋大学 大学院社会学研究科 客員教授

◎共同研究員

会田 弘継	共同通信社 編集委員兼論説委員
阿部 珠理	立教大学 社会学部 教授
天江 喜七郎	国立京都国際会館 館長
飯山 雅史	読売新聞 調査研究本部 主任研究員
石合 力	朝日新聞社 GLOBE編集部 副編集長
石川 真作	京都文教大学 客員研究員
石川 卓	防衛大学校 人文社会科学群 准教授
伊奈 久喜	日本経済新聞社 論説副委員長
菅野 賢治	東京理科大学 理工学部(教養) 教授
菊池 恵介	東京経済大学 非常勤講師
小泉 洋一	甲南大学 法学部 教授
武井 彩佳	学習院女子大学 国際文化交流学部 専任講師
田原 牧	東京新聞 特報部 記者
出川 展恒	日本放送協会 解説委員
中谷 直司	同志社大学 一神教学際研究センター 特別研究員
中西 久枝	名古屋大学 大学院国際開発研究科 教授
宮家 邦彦	AOI外交政策研究所 代表
宮坂 直史	防衛大学校 人文社会科学群 教授
百瀬 好道	日本放送協会 解説委員
山口 昇	防衛大学校 防衛学教育学群 教授
横田 貴之	(財)日本国際問題研究所 研究員

◆ 2009年前半活動報告 ◆

2009年2月18日 (水)

第1プロジェクト 研究会

『「グローバル化する一神教の思想的研究」の目的と課題』

発表者：中田 考 (同志社大学 神学部神学研究科 教授)
三宅 威仁 (同志社大学 神学部神学研究科 教授)
手島 勲矢 (同志社大学 神学部神学研究科 教授)

会場：同志社大学 扶桑館2階 マルチメディアルーム 1

2009年2月28日 (土)

一神教学際研究センター／日本オリエント学会

／神学部神学研究科共催 公開講演会

『古代メソポタミアの神話と宗教』

—「ギルガメシュ叙事詩」の魅力を中心に—

講師：月本 昭男 (立教大学 教授・日本オリエント学会 会長)

会場：同志社大学 クラーク記念館 礼拝堂

2009年5月23日 (土)

第1プロジェクト 第1回研究会

『イスラームにおける人権および言論の自由について』

発表者：富田 健次 (同志社大学 神学部神学研究科 教授)
中田 考 (同志社大学 神学部神学研究科 教授)

コメンター：濱 真一郎 (同志社大学 法学部法学研究科 教授)

高木 久夫 (明治学院大学 教養教育センター 准教授)

会場：新島会館 E会議室

2009年5月26日 (火) 新型インフルエンザの影響により中止

第1プロジェクト 公開講演会

『ポスト世俗主義時代における普遍的価値の追求』

—宗教の可能性—

講師：Hent de Vries (ジョンズ・ホプキンス大学 教授)

コメンター：酒井 直樹 (コーネル大学 教授)

磯前 順一 (国際日本文化研究センター 准教授)

会場：同志社大学 神学館 礼拝堂

2009年6月13日 (土)

第1プロジェクト 第2回研究会

『ユダヤ教内におけるイエス派宗教運動—内在から分離へ—』

発表者：石川 立 (同志社大学 神学部神学研究科 教授)

コメンター：村山 盛葦 (同志社大学 神学部 助教)

会場：同志社大学 寧静館5階 会議室

2009年6月27日 (土)

第2プロジェクト 公開講演会

『フランスにおける“郊外の若者”の経験とイスラームについて』

講師：森 千香子 (南山大学 外国語学部 准教授)

会場：同志社大学 神学館 礼拝堂

第2プロジェクト 第1回研究会

『フランスにおける“郊外の若者”の経験とイスラームについて』

発表者：森 千香子 (南山大学 外国語学部 准教授)

コメンター：伊達 聖伸 (東北福祉大学 講師)

会場：同志社大学 寧静館5階 会議室

2009年7月2・3日 (木・金)

第1プロジェクト 国際ワークショップ

『On Dialogue between Islam and Judaism:“Others” and “Ours” in Re-thinking』

セッション 1

『From Religious Perspectives in Theories』

発表者：Yakov Rabkin (モントリオール大学 教授)

Hashim Kamali (マレーシア国際イスラーム研究所 (IAIS) 所長／教授)

コメンター：三浦 伸夫 (神戸大学 国際文化科学研究科 教授)

中田 考 (同志社大学 神学部神学研究科 教授)

市川 裕 (東京大学 大学院人文社会系研究科 教授)

仁子 寿晴 (京都大学 イスラーム地域研究センター 人間文化研究機構研究員)

セッション 2

『From Historical Perspectives at Issues』

発表者：Esther Benbassa (ソルボンヌ大学高等研究実習院

(EPHE) 教授)

Osman Bakar (マレーシア国際イスラーム研究所

(IAIS) 副所長／教授)

コメンター：白杵 陽 (日本女子大学 文学部 教授)

Samir Nouh (同志社大学 高等研究教育機構 教授)

セッション 3

『From Reflections and Visions in Dialogue』

インシエーター：板垣 雄三 (東京大学 名誉教授)

岡 真理 (京都大学 大学院人間・環境学研究科 教授)

池田 明史 (東洋英和女学院大学 国際社会学部

教授)

会場：新島会館 F会議室

2009年7月11日 (土)

第1プロジェクト 第3回研究会

『I. バーリンとL. シュトラウス：

政治マイノリティとユダヤ世俗主義』

発表者：濱 真一郎 (同志社大学 法学部法学研究科 教授)

高木 久夫 (明治学院大学 教養教育センター 准教授)

コメンター：内藤 正典 (一橋大学 大学院社会学研究科 教授)

会田 弘継 (共同通信社 編集委員室 編集委員)

会場：同志社大学 寒梅館6階 大会議室

2009年7月25日 (土)

第2プロジェクト 公開講演会

『オバマ政権の新中東政策を考える』

講師：山口 昇 (防衛大学校 防衛学教育学群 教授)

宮家 邦彦 (AOI外交政策研究所 代表)

会場：同志社大学 クラーク記念館 礼拝堂

第2プロジェクト 第2回研究会

『オバマ政権の新中東政策を考える』

発表者：山口 昇 (防衛大学校 防衛学教育学群 教授)

宮家 邦彦 (AOI外交政策研究所 代表)

コメンター：松永 泰行 (東京外国語大学 世界言語社会教育センター 准教授)

石川 卓 (防衛大学校 人文社会学群 准教授)

会場：同志社大学 至誠館3階 会議室

◆ 来訪者記録 ◆

年月日	氏名	所属機関・役職	国名
2009/7/2-3	Yakov Rabkin	モントリオール大学 教授	カナダ
	Esther Benbassa	ソルボンヌ大学高等研究実習院(EPHE) 教授	フランス
	Hashim Kamali	マレーシア国際イスラーム研究所(IAIS) 所長/教授	マレーシア
	Osman Bakar	マレーシア国際イスラーム研究所(IAIS) 副所長/教授	マレーシア
	Jean-Christoph Attias	ソルボンヌ大学高等研究実習院(EPHE) 教授	フランス
	板垣 雄三	東京大学 名誉教授	日本
	池田 明史	東洋英和女学院大学 国際社会学部 教授	日本
	臼杵 陽	日本女子大学 文学部 教授	日本
	岡 真理	京都大学 大学院人間・環境学研究科 教授	日本
	三浦 伸夫	神戸大学 国際文化学研究科 教授	日本
	仁子 寿晴	京都大学 イスラーム地域研究センター 人間文化研究機構研究員	日本
	赤尾 光春	大阪大学 人間科学研究科 特任助教	日本
2009/6/27	伊達 聖伸	東北福祉大学 講師	日本
2009/2/28	月本 昭男	立教大学 教授・日本オリエント学会 会長	日本
2009/2/27	Saied Reza Ameli	テヘラン大学 世界研究科教授/副学長	イラン
	Mohammad Naghizadeh	明治学院大学 教授	日本
	田浪 亜央江	国際交流基金日本研究知的部交流部 欧州・中東・アフリカ課 中東担当専門員	日本

発行 同志社大学 一神教学際研究センター (CISMOR)
 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
 TEL 075-251-3972 FAX 075-251-3092
 E-mail: info@cismor.jp
 http://www.cismor.jp/
 編集 CISMOR事務局編集部
 執筆協力 高田 太
 印刷 中西印刷株式会社